

鎌倉フルートアンサンブル

フルートを始めてもう二十年以上になるのに音程についてはまるで自信が無い。

楽器を語るのにのっけから自分が不確かな音しかあやつれないことを告白してしまつてはそれこそ話にならないが、刻苦努力してもどうにもならないことは人生いくらでもあるし、正直の頭に神宿るということもある・あるだろう、いやあるに違いない。

高校生の頃だったかビゼーの「アルルの女」を聴いてすっかり気に入り、それまで吹いたことはおるか手にとつて見たことも無かつたのに、ヨウシこれだ、あれを吹けるようになりたい、稼げるようになったらまずフルートを買うぞと決めた。

初めは賑やかでちよつと飽きて来た頃、同じ組曲中の「メヌエツト」に聴き及んで、ハーブの伴奏に乗つたフルートの澄んだ音色の美しさに仰天したのだと思う。丁度それまでのSPに比べて雑音の格段に少ないLPレコードの時代が始まつた頃、五十年前、実に石器時代の話である。勿論一枚二千円もするLPレコードが高校生に買えるわけはなく、好ましい楽曲を発見して自分の音楽の世界が広がるのを実感するのはすべてラジオからであった。珈琲一杯五十円の名曲喫茶に出入りするのには大学生になつてからだった。

その頃は勿論のこと、ほぼ十年後、いよいよ二万五千円ほどの安物（多分プラスバンド用のずっしり重い量産品だったと思う）を買つて教則本を頼りに吹き始めた時も、運指表の示す通りに穴を塞いだり開けたりすれば正しい音が出るものと思ひ込んでいた。実際に音が出るようになるまでに相当苦労したはずだけれど、初めにどんな風に練習したのか実はあまり覚えていない。多分口もと咽喉も思い切り緊張させて必死の形相で吹いていたに違いない。後年内田秀夫先生について習うようになってから随分直されたけれど、最低音部では咽喉が鳴つて楽器と一緒に歌う、というより唸る癖はいまだに抜けないし、高音の難しいフレーズになると、ともしれば口もとを締めて音を搾り出そうとする。腹筋を上手に使う訓練がまるで出来ていなかった、というよりもそんなことはちつとも知らなかつたのである。

独学は遠回りで上達も遅いし、妙な癖が付いてあとで始末が悪いから初歩の時から良い先生についたほうがいいと今では思うけれど、音楽教室がどこにでもあるという時代ではなかつたから仕方がない。やがて二オクターブ半ぐらいなんとか音を並べられるようになりはしたが、とても音楽にはならないことが解つたのと、折から本業の修業の方も忙しい年代でもあつたりで、結局挫折してしまつた。でもいつかは「メヌエツト」を吹ける様に

なりたいたいというひそやかな野望は持ち続けていた。

埃だらけの楽器をまた持ち出したきっかけは鎌倉中央公民館のフルート教室開講のお知らせだった。昭和五十八年の春ではなかっただろうか。十七年前になる。

我流の笛吹きが初めて専門家の音を聞いてまず驚いたのは豊満とても形容するしかないその響きだった。それまで指がよく動いて滑らかに旋律が流れ出ていくのが上手な演奏だと思い込んでいたのが、先生がたつた一つの音を吹いただけであたりに鳴り渡る響きが、貧弱な生徒のそれとはまるで違うのに度肝を抜かれて、指遣いなどの問題ではないことがよく分かった。胸腔からフルートの先端までの一塊の空気が横隔膜と腹筋に支えられて共鳴する吹き方が出来なければこんな音は出ない。

粒の揃った良い音を並べて音楽にするにはまず咽喉を絞めないで腹筋で吹ける様になることが第一だと教わって納得はしたが、納得しても出来るとは限らない。短時間なら出来ても、常にそうするというのが簡単ではない。悩みは誰しも同じらしく、透明な筒の中のピンポン球を吹き上げてそれが落ちないように腹圧を保って呼吸を続ける訓練用具が昨年売り出されたが、需要が多くてこの楽器店でも品薄だそうだ。私達の鎌倉フルートアンサンブルでも先生に勧められてほぼ全員がこれを買って練習の前に揃って吹いている。この構造はどこかで見たことがあると思ったら気管支喘息患者の使うピークフローメーターを改変したものだという。

音色の違いは素人にもすぐに判ったが、ほんとに専門家の凄さに驚き入って、才能の無い自分には到底真似の出来ないことだと諦めてしまったのは音程だった。フルートは頭、胴、足の長短二本の管を接いで一本にして、頭に開けた穴の縁に息を吹きつけて音を作る。胴と足に開けた穴を指で開閉することで共鳴する管の長さを変えて音階を作る仕掛けから想像して、音の高さと指の位置は一対一で対応していると思っ込んでいたが、呼吸の勢い、口唇の開け方、口吻と管との角度、頭と胴の接ぎ方、さらには管の暖まり方などでひどく違うものなのだそうだ。そして一番悲しいのはその微妙な違いが自分たちにはてんで解らないことだった。誰もが絶対音感がないどころか音感そのものがあやしいのだから仕方がない。

あまり言いたくはないが、今でも合奏練習の途中で先生が遂に我慢し切れなくなって全員管の長さを再調節させられることもある。この時も無論先生の地獄耳が頼りである。なにしろ四部に分かれて各パートが最強音を鳴らしている時でも個々の音を聞き分けている先生だから、それが半音も高さが違っただけなら気持ちが悪くなるのも無理は無いのかもしれないが、こちとらにはほんとに馬耳東風、いくら集中して聴いても直される前後の音の違いが判らない。同じように聴こえる。

初めは修練すれば判るようになるものかと思っっていたがとんでもない話で、素人から見れば超能力としか思えないこの音感を遂に理解できないまま今日まで来てしまった。さらにいえば私はリズム感もすこぶるあやしく、頼りにする先生の指揮棒の無い独奏のとき、もろにその弱点が出てしばしば恥を掻いているけれど、こっちの方は音程と違ってあ

れ変だよというのが自分で判るからまだしも救いがある。私の特に苦手なのは「後打ち」で、バスフルート一本で他のパートに抗して孤独にリズムを刻む時、間違えるなよと念ずるとかえって間違えたりする。低音だから目立たなかったということにして知らんぷりを通すしかない。

鎌倉フルートアンサンブルはこの秋に、十五周年記念演奏会を開く。おこがましいけれど今年は念願のモーツァルトがプログラムに乗ることになった。専門家から見れば音痴同然のド素人集団でも良い指導者を得ることが出来ればアイネ・クライネ・ナハトムジークもちゃんと演奏出来るところを見せたいと思っている。

例の「アルルの女」の「メヌエット」は十五年前、フルート教室が発展解消してアンサンブルに衣替えする時、公民館の舞台上で記念に演奏させて貰った。出来はいわずもがな。